四

簪の有るだけ書いて出す暮の文

師走は年末年始の遊客と正月松の内の仕舞い客を呼ぶべく、あらゆる手管を使う。

そんな慌ただしい十二月、磐音はその日から四郎兵衛会所に居候することになった。

南町奉行所の切れ者与力の命とあっては、断るわけにもいかない。それに四郎兵衛にも奈緒のことで世話になると思うと、

「里の中だけでは騒ぎは起こしたくございません」

と言う四郎兵衛の懸念をなんとか防いでやりたい。

そんなこんなで、大門の開いている間、会所に磐音が詰めることになったのだ。

「坂崎さん、廓の見回りに行きますがどうですかな」

四郎兵衛に誘われて大門から水道尻まで南北に貫く仲の町、百三十五間に出た。

会所の前は待合ノ辻と呼ばれ、そこを挟んで町奉行所の隠密方が詰める面番所があった。四郎兵衛といっしょに現れた磐音を同心がなにやら思惑ありげに見ていたが、上役の年番方与力の、

「あの者には自由にさせよ」

との言葉もあって黙っていた。

四郎兵衛と磐音は桜並木に沿ってそぞろ歩く。

小林琴平に連れられて吉原に冷やかし客の一人として来たことはあった。それに豆造の母親が遊女に見を落としたときに会いにも来た。だが、押し込み強盗の田野倉源八を捕縛するため、廓の中で待ち受ける身になるなどとは考えもしないことだった。

葉を落とした桜並木は小さな蕾を膨らませ始めていた。左右に連なる引き手茶屋の軒には、赤い提灯が遊女三千人の里を赤く染めていた。そんな通りを遊客が茶屋から楼にうきうきと案内されていき、銭のない客が格子の中を冷やかして歩く。

「四郎兵衛様、お見回りご苦労にございます」

「なんぞございませぬかな」

吉原会所のかしらが行くと、引き手茶屋から女将や番頭が声をあっけ、それに四郎兵衛が一々応えていく。

「俗に京島原の女郎に江戸吉原の張りを持たせ、長崎丸山の衣装を着せて、大阪新町の揚屋で遊びたしと通人が申しますが、五丁町の賑わいに匹敵する里がございましたかな」

ふいに四郎兵衛が磐音に訊いた。

五丁町とは中の町の左右に連なる江戸町一、二丁目、京町一、二丁目、角町の五つを差しての呼び名だ。

磐音が歩く安永期の里には揚屋町、伏見町、堺町が加わり、八丁あった。ともあれ、京の吉原の格式を引き移した五丁町が吉原の別称だ。

「四郎兵衛どの、長崎丸山も異国の風情が満ち満ちて、男心を魅惑する里にございましたし、京の島原も雅な情緒がそこはかとなく漂っておりました。ですが、遊里の筆頭は、間違いなく華の吉原にございます」

磐音の正直な気持ちだった。

「京には今も揚屋が残っておりましょう。妓楼から遊女を呼び、遊ばせる貸し座敷です。江戸も元吉原の時代には各町に二、三軒の揚屋がございましたが、いつの間にか引き手茶屋に取って代わられました」

四郎兵衛は京町一丁目の辻を曲がった。すると紅殻格子の遊女屋の張り見世から、

「四郎兵衛様、お連れの侍は、お客かえ」

「玉秀太夫か。このお方はわしの友でな、手出しなどしてはならぬぞ」

「顔立ちが好みにありんす」

年増の遊女が冗談とも本気ともつかぬ言葉を平然と口にし、吸い付けた煙管の口を格子の間から磐音に差し出した。

「玉秀どの、見てのとおりの野暮侍だ。以後、昵懇にお見知りおきを願います」

磐音は煙管を一服吸うと玉秀太夫に返した。

「玉秀どのときやったか」

笑みを浮かべて会話を聞いていた四郎兵衛は、さらに通りの奥へと歩を進めた。

「忘八という言葉をご存じか」

「忘八にございますか」

磐音は首を傾げると、

「妓楼のあるじのことを差す言葉にございますよ。孝、悌、忠、信、礼、義、廉、耻の八つの道徳を忘れさせるほどに面白きところが廓にございます。同時に廓の主は、それを忘れなければならないほどの冷酷非情に徹しなければ務まりませぬ。だから、楼主は忘八なのです」

京町一丁目を突き当たると、ふいに明かりが薄暗くなった。

そこは片側見世が並び、西河岸あるいは鉄砲河岸と呼ばれる最下級の切見世であった。

鉄砲河岸とは遊女の梅毒などにあたるから、そう呼ばれた。

間口四尺五寸の狭く細い長屋が遊女たちの暮らしの場であり、身を売る仕事の場でもあった。

零落した遊女たちは、病に落ちたものや年老いた女郎が吉原で生きていくために一切り百文で体を売っていた。

紅殻格子の向こうから清掻の調べが響いてくる五丁町とは対照的に、なんとも陰惨な場所だった。

格子の間からふいに女の細い手が伸びてきて、四郎兵衛や磐音の腕をとろうとした。

「おいおい、会所の四郎兵衛ですよ」

「なんあ、頭の見回りかい。銭もならないねえ」

「撃で働きなされ」

暗い通りじゅうに饐えた臭いが漂っていた。そんな間から、装われた嬌声が流れてきた。

四郎兵衛は西河岸から再び揚屋町の表通りに出てくると、

「東西百八十間、南北百三十間の吉原は、遊女らを筆頭に一万人もの者が暮らして、極楽から地獄を見せてくれます」

四郎兵衛は磐音に千両の身売りをされた奈緒の行く末を見せるために、見回りに連れ出したようだ。

「俗に遊女三千人の世界と申しますが、実際は四千人近い女たちが見栄えと妍と張りを競っておりますのじゃ。そのような遊女の手練手管に落ちて、田野倉源八のように人を斬り殺してまで通い詰める者も出てくる。千金の一夜暮らしの贅沢も切見世の刹那の楽しみも、すべては夢幻にございますよ」

「肝に銘じておきます」

「年寄りの悪い癖だ。つい説教じみたことを申したようですな」

揚屋町に四郎兵衛の笑い声が響いた。

その夜、磐音は大門が閉じる四つまで会所に詰め、もはや田野倉源八が姿を見せないことを確かめて、吉原の通用口を出た。

衣紋坂には冷たい風が吹いていた。

磐音は、風に逆らって日本堤に出た。

朝には宮戸川へ鰻割きに行かねばならぬ身だ。となれば、金兵衛長屋に戻って体を休めねばならない。

磐音はひたすらに早足で深川への道を辿った。

磐音が鰻割きに没頭していると人影が立った。

顔を上げると慈姑頭が笑っていた。

肥前長崎で別れた蘭医の中川淳庵だ。

「中川さん、江戸に戻ってこられたのですか」

「十日ばかり前にね。あなたの長屋を尋ねると、大家どのがこちらを教えてくれたのです」

頷いた磐音が手は休まずに、

「『ターヘル・アナトミア』の翻訳の添削は終わりましたか」

「苦労した甲斐あって、どうにかおわりました。杉田玄白先生も前野良沢先生も喜ばれましてね。来夏には下版できましょう」

「それはおめでたい」

鉄五郎親方が顔を出して、

「坂崎さん、もう峠は越えた。後片付けは松吉とじいさんに任せて、こちらに来なせえ」

と戸口から声をかけてきた。

「もう残りもねえや。手足を洗っていいぜ」

松吉も言葉を添えた。

磐音はその朝の最後の一匹を割いた。すると淳庵が、

「坂崎さんは、外科医になっても十分に食っていけますよ」

と笑った。

「私が医師になれますか」

「その小刀の捌き具合は、人の開腹手術と同じです。できますとも」

二人の会話を聞いていた松吉が、

「おかしな侍の友達はまた毛色が変わってるぜ」

と呟いた。

鉄五郎は淳庵の朝餉も用意してくれた。

「中川さん、鉄五郎親方には身内同様の付き合いを許してもらっています」

磐音は鉄五郎が奈緒のことを承知していると告げた。

宮戸川自慢の朝餉を食べながら、磐音は長崎以来の行動を淳庵に話した。

「なんと坂崎さんは奈緒どのを追って、肥前長崎から小倉、赤間関、京、金沢と遊里めぐりですか」

「はい、ただいまは吉原の会所に昼間詰めております」

「そのような旅をする者は、世間広しといえばどもまずおるまい」

「南蛮の医学書の翻訳の調べに命を張って肥前の長崎まで出かけられる人も、滅多にいませんよ」

「そうかな」

「そうですとも」

二人のかたわらで話を訊いていた鉄五郎が、

「お二人とも十分に浮世離れしておられますぜ」

と笑い出した。

朝餉を馳走になった二人は、深川から本所へと抜けて吾妻橋を渡った。

「坂崎さん、奈緒どのの件ではなんの役に立てません。だが、私の力がいるときは、小浜藩の江戸屋敷に訪ねてきてください」

「承知しました。中川さん、裏本願寺の血覚上人一味がこの江戸で策動するようであれば、いつでも知らせてください」

「まあ、お互い頼るときがないことのほうがよいですがね」

御蔵前通りで二人は左右に別れ磐音は吉原へと向かった。

田の倉源八が香実楼の秋葉太夫に顔を出すと約束した日、朝から雪がちらちらと舞い始めた。それが昼過ぎには積もるほどに激しさを増し、止む様子はなかった。

南町奉行所では、年番方与力の笹塚孫一が与力同心を集めて、一匹狼の押し込み強盗の田野倉が吉原の秋葉太夫と約束した日ゆえ、

「今夕にも両替商や札差などに押し込むやもしれぬ。格別に気をつけて警戒せよ」

と訓示をして、定廻り同心らを見回りに送り出した。

米沢町の今津屋にもそのことは知らされた。むろん、品川柳次郎と竹村武左衛門の二人が朝から詰めていた。

おこんが二人に茶を運んできて、

「坂崎さんたら、一人で吉原なんてずるいわね」

と複雑な顔で言った。

「おこんさん、遊びに行ったのではありませんよ。一銭にもならないのに凄腕の押し込みを待ち受ける役だ、損な役回りです」

「会所からは手伝い料が出ないの」

「大頭の与力どのの頼みだ。吉原が望んだことではありませんからね」

「いつだって、間尺に合わない仕事ばかりさせられるのねえ」

「おこんどの、そこがまた坂崎さんのお人柄だ。この先なにかの役に立とう」

と竹村武左衛門が言い、おコンが浮かぬ顔で、

「だといいんだけど……」

と呟いた。

夕暮れ、雪見と洒落た遊客で吉原はいつもの賑わいを見せていた。だが、いつもは暮れ六つ前後に顔を見せるという田野倉源八は、姿を見せなかった。

「雪で来るのを見合わせましたかなあ」

磐音が四郎兵衛に訊いた。

「いや、参ります」

吉原の里の警備を長年務めてきた頭分が言い切った。

「田野倉は秋葉の手練手管にぞっこんです。遊女の約定の背後には、この遊里の技のすべてが込められているのです。必ず参ります」

再び請け合った。

だが、じりじりとした時間が流れるばかりで、香実楼から、

「田野倉源八が揚がった」

という知らせは届かなかった。

大門が閉められる刻限の四つが近付き、中庭に降りしきる雪に目を止めた四郎兵衛が、

「年寄りの勘が狂ったかな」

と呟いた。その直後、

「田野倉源八が香実楼に揚がりました」

と手代が知らせてきた。

「かねての手配どおりにせよ」

四郎兵衛が短く命じた。

「心得ました」

手代たちが雪の中の見張りについた。

「坂崎様、長い夜になりましたな」

田野倉源八はいつも七つ半前には大門を出るという。衣紋坂にかかる源八を磐音と南町奉行所の捕り方が待ち受けるという手筈だった。

むろん笹塚孫一のもとにも知らせは届けられていた。

会所の奥座敷で四郎兵衛と磐音は、ただ時が来るの待った。

田野倉源八は、その夜、秋葉との床入りでどことなく、

（感じが違う）

と思った。

あのときの秋葉の声は、嫋々と低く続いた。が、その夜の秋葉は、源八に縋り付いて、乱れた調子に高く低く洩らし続けた。

荒い息を弾ませる秋葉に、

「寝ておれ、厠に参るでな」

と言い置いた源八は秋葉の部屋を出ると、廊下の突き当りの厠に向かった。

総籬の大見世なれば、引き手茶屋を必ず通さねばならない仕来りがあり、うるさい。だが、中見世の香実楼では、直に楼に客が訪ねてきても挙がれた。

源八は小便をしながら、先ほど感じた違和を思い起こしていた。肌身を重ねて、遊女がその気になってきた証と考えられた。

（だが、ちとおかしい……）

源八は、厠を出ると足音を忍ばせて遣り手の部屋に向かった。

密やかな声が聞こえた。

「野郎、遊女の部屋に入るな」

「秋葉に夢中さ、朝まで鳴き通しだねえ」

源八の背筋に悪寒が走った。ゆっくりと踵を巡らせた源八は部屋に戻ると身支度をした。

「ぬし様、どうしやった」

秋葉がとこから起き上がった。

「裏切ったか」

懐に忍ばせてきた小刀が秋葉の喉元に当てられた。

「太夫、雪の中の道行きだ」

源八は寝巻きの腰に悩ましくも帯を巻きつけただけの秋葉の手を引くと、部屋を出た。ゆっくりと廊下を歩き、遣り手の部屋の前を過ぎた。

遣り手が口をあんぐりと開けて、

「太夫、なんですね」

と洩らした。

二人は階段を下りると、刀架けの置かれた部屋に入り込み、源八は細身、朱塗りの大小を腰に戻していた。

そのとき、遣り手の声が響いた。

「源八が気付きやがったよよ！」

源八は大階段に出ると表戸が閉じられた土間に飛び降り、通用口に体当たりすると雪の通りに飛び出した。

裸足で飛び出した二人に会所の見張衆が気付いた。一人の手代が会所に知らせに走った。

源八は秋葉の手を引くと京町から仲の町に出て、大門へ走った。それを遠巻きにして会所の男たちが追った。

「待て待てっ！」

面番所の隠密廻り同心が、走り来る二人の前に待合ノ辻で立ち塞がった。

知らせを受けた四郎兵衛と磐音が会所から飛び出したとき、隠密廻り同心と源八が二間の間合いで向き合っていた。

「種村様、年番方与力笹塚様の命にございます。そのものたちの始末、会所に任せて下され」

四郎兵衛が呼びかけた。

だが、種村と呼ばれた同心は、

「会所が要らざる口出しをいたすな！」

と叫ぶと、

「吉原は町奉行所隠密方の支配下にある。そなたら、大門の外にはこの種村金五郎が半歩たりとも出さぬ」

と十手を翳した。

源八は左手で秋葉太夫の手を引きながら、右手をだらりと下げた。

土州流の居合いの間合いにすでに入っていた。

だが種村は、それを立ち竦んだと見たようだ。

「神妙にいたせ！」

十手を振りかざして打ちかかる種村の前に源八が出ると、腰が沈み、だらりと下げられていた右手が清流を泳ぎ上がる鮎のように閃き、細身の剣を抜き差しにして、飛び込んできた相手の腰を深々と切り割っていた。

げえっ

降りしきる雪を真っ赤に染めて、種村金五郎が雪の待合ノ辻の倒れ伏した。

磐音は、ゆっくりと通用口の前に立った。すると戸が外から開いて、陣笠に雪を降り積もらせた笹塚孫一が入ってきた。そして、待合ノ辻の光景を見回し、

「愚か者が」

と吐き捨てた。

源八は磐音の前に向かってきた。

「どけ！」

源八が叫んだ。

「土州流の居合いを見るのは出雲路の斐伊川以来、二度目です」

磐音の声は、死と血が漂う大門前にのどかに響いた。

（うっ）

という表情で源八が磐音を凝視した。

「元今今治藩松平壱岐守様御小姓組田野倉源八どの、そなたが懸想した上に不埒も殺した小田嶋耀どのの姉上と、亭主の小田嶋参次郎どのを返り討ちにするところを偶然にも拝見いたした」

「……」

「そなたは江戸に出て、押し込み強盗を働き、何人もの人の命を殺め、多額の金子を強奪してきたそうな。返り討ちは武士道の定法にござれば、いたしかたない。だが、無辜の民を殺めた罪は許せぬ」

「ぬかせ」

源八が秋葉太夫の手を初めて話した。

「源八様、許してくだされ」

その言葉が遊女から洩れた。

が、もはや、源八の注視は秋葉に向けられなかった。

「居合いは鞘の内で勝負が決まるという。田野倉どの、朱鞘に刀を戻しなされ」

磐音は源八に言い放った。

「大言をしおって」

源八が待合ノ辻の中央に戻りつつ、剣を鞘に納めた。

磐音が歩を進めた。

倒れ伏した種村金五郎の背にはもう白い雪が薄く降り積もっていた。

不夜城の吉原の大門前に再び殺気が漂った。

磐音と源八は、一間半で睨み合った。

長身の磐音は、まっすぐに背筋を伸ばして立ち、備前包平の豪剣の柄に軽く手をかけた。

細身の源八は腰を沈めて構えた。

右手は例によってだらりと下げられていた。が、左手は鞘元に、透かし鍔をはじき出すように当てられていた。

霏々と降る雪に不動の姿を保った二人が動いたのは、待合ノ辻の、蕾をつけた桜の枝から雪が、

どざり、

と落ちて音を立てたときだ。

雪が舞う傾城の里を源八が走った。

生死の間合いが一気に切られた。

源八の沈められた腰が伸び上がるように上がり、右手が腹前で翻って、左指が鍔を弾き出し、白い光が雪夜に躍った。

磐音は、不動残しを沈め、無音の気合いとともに包平二尺七寸を抜き上げた。

二つの光の円弧が交錯した。

きーん！

刃と刃がぶつかる音がして、細身の剣が弾け飛んだ。さらに大きな円弧は柔らかく伸びて、突進してきた源八の胴を存分に薙ぎ斬っていた。

ううっ

白い雪を朱に染めて、源八が倒れ伏した。

「源八様っ！」

秋葉の叫びが雪華の吉原にか細く響いた。

「ご祈祷ご祈祷とんちきとんちき」

狐舞いが吉原の見世見世を廻って、新造やかむろを追いかけ回すのは、大晦日の風物詩だ。

狐舞いに抱きつかれると、身ごもると言い伝えられ、新造たちは必死で逃げ回った。

磐音はその狐舞いの敲く太鼓と横笛の音を聞きながら、会所の戸口に立った。すると顔見知りの手代が、

「四郎兵衛様がお待ちです」

といつもの奥座敷に案内していった。

「いよいよ押し詰まりましたな」

「坂崎様、その節は世話をかけました」

「結局、里の中を血で汚すことになりました」

「あなたの責任ではありません。血気にはやる同心どのがいなければ、待合ノ辻を朱に染めることもなかった」

と言った四郎兵衛が、

「些少だが餅代にございます。受け取ってくだされ」

と堤を差し出した。

「四郎兵衛どの、それがしは吉原に頼まれて動いたわけではありませぬ。どうかそのような配慮はご無用に願います」

「あの笹塚様があなたの働い賃を払ったとも思えない。なあに吉原の習わしと思うて、受け取ってくれませんか」

「よろしいのございますか」

「年寄りに恥をかかせるものではございませんよ」

「ありがたく頂戴します」

と押し頂いた包みには、小判が十両ほど入っているようだ。

「助かりました。家賃は払いましたが、実は米、味噌の払いをどういたそうかと考えていたところです」

四郎兵衛が声を上げて笑う。

「坂崎様、あなたはほんにおかしなお侍でございますな」

と感心した。

二人は供された茶を啜った。

のどかな大つごもりの時が流れていく。

「坂崎様、奈緒様の行方が分かりました」

ふいに四郎兵衛が言った。

磐音は顔を上げて、四郎兵衛を見た。

「江戸町二丁目に丁子屋という大籬ございます。ご存じですかな」

「はい」

「吉原でも一、二を争う格式の大見世です。当代の楼主は、宇右衛門様でしてな、この見世の寮が根岸の里にございます。どうやら、奈緒様とおぼしき女性がこの数か月寮に囲われて、吉原の遊芸百般を教えこまれていたようにございます」

「やはり奈緒どのは江戸でしたか」

「宇右衛門様は、松の内の七日、趣向を凝らした道中で吉原に繰り出されるそうにございます。私も生まれついてこの里に暮らしてきましたが、かような送り込みは初めてにございます」

（もはや、奈緒はての届かぬ世界に旅立ってしまった）

磐音はそう思いながら、目を瞑った。

「丁子屋が京に支払った金子は千二百両にございましたそうな。法外な値にございます」

「…………」

「坂崎様、あなたの役に立ちたいと思うが、もはやこの年寄りにはなんの力もございません」

「四郎兵衛どののご親切、それがし、忘れることはございませぬ」

四郎兵衛がぽんぽんと手を叩いた。すると用意されていた膳が二つ出てきた。

「行く年を忘れるもよし、思い出すもよし。年寄りに付き合うてくだされ」

磐音は黙って頷いた。

狐舞いに追いかけられたか、かむろの幼い声が吉原に流れて消えた。